

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.55

編集・発行 佐賀県立九州陶磁文化館

発行年月日 2019. 3. 22

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

<http://saga-museum.jp/ceramic/>

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp



いろ え じんぶつもんさかながたふたもの 〈色絵人物文 魚 形蓋物〉

肥前・有田 久富
1840～1860年代
九州陶磁文化館所蔵
山口裕也氏・山口智也氏寄贈

江戸後期～幕末に有田で作られ、海外へ輸出された魚の形をした蓋物です。

底部には呉須で「蔵春亭／三保製」と書かれており、^{ひさとみ}久富家の製品であることを示します。久富家は、有田焼の海外輸出を再開させた立役者であり、佐賀藩より独占販売権を得ていました。魚の鱗や^{うろこ ひれ}鰭などの青は染付で描かれていますが、^{しりびれ}臀鰭には色絵の青を使用しています。魚の背には、色絵で張鷟乗槎図など中国の故事を描いた人物文に和歌・漢文を添え、^{おびれ}尾鰭の中には乗船図と星座を書いています。

チェコ共和国のチェスキー・クルムロフ城にも、文様の異なる類品があります。

～平成31年度特別企画展・企画展のお知らせ～

特別企画

[有田×野老]展

ARITA×TOKOLO EXHIBITION

○開催趣旨

「つなげる」をテーマに紋様の制作を続ける美術家・野老朝雄（ところあさお）氏にインスピレーションを与えた古い有田焼と、野老氏が魅了される「青」の色彩を主題に、古典技法と最新技術の融合や独自の切り口で新たな有田焼の可能性を模索する展覧会。

未来につなぐ有田焼の「青」の世界をお楽しみください。

○主催 有田×野老展 実行委員会（仮称）

○会場 佐賀県立九州陶磁文化館
第1・2展示室

○会期 2019年9月20日（金）～11月24日（日）

○休館日 月曜休館（月曜日が祝日の場合は開館。
その翌日の火曜日を閉館。）

○観覧料 有料



(Photo by OYAMADA Kuniya)

野老朝雄氏プロフィール

野老朝雄 / Asao TOKOLO / 美術家

<http://www.tokolo.com>

1969年 東京生まれ。

幼少時より建築を学び、江頭慎に師事。2001年9月11日より「繋げる事」をテーマに紋様の制作を始め、美術、建築、デザインの境界領域で活動进行。単純な幾何学原理に基づいて定規やコンパスで再現可能な紋と紋様の制作や、同様の原理を応用した立体物の設計／制作も行なっている。

2016年～ 東京大 工学部非常勤講師、
東京造形大学客員教授

2017年～ 筑波大学非常勤講師

2018年～ 東京大学教養学部非常勤講師

〈野老朝雄氏の近年の主な作品〉

2013-16年

「大名古屋ビルヂング」のための下層部ファサードガラスパターン制作

2016年

東京2020オリンピック・パラリンピックエンブレム

2017年

「大手町パークビルディング」のための屋外彫刻作品



野老朝雄氏のデザインによる有田焼、ぐるなび総研「今年の一皿®」記念品（2016～2018年制作）

新収蔵品展1 寄贈記念 今泉吉郎・吉博コレクション

○会 期 2019年10月5日（土）～11月24日（日）

「今泉^{げんゆう}元佑」のペンネームで、肥前陶磁研究家としても広く知られた今泉吉郎氏と御子息の吉博氏。親子二代にわたり時間をかけて集められた貴重なコレクションが、このたび九州陶磁文化館に100点寄贈されました。

鍋島焼や嬉野の吉田焼を含む、江戸前期を中心とする質の高い肥前磁器の貴重なコレクションです。寄贈を記念して、研究史的にも重要なこれらの資料を、昭和60年（1985年）に吉郎氏が寄贈された「染付山水^{そめつけさんすい}文輪花大皿（重要文化財）」とあわせて展示します。



そめつけさんすいもんりん か おおざら
染付山水文輪花大皿 重要文化財
肥前・有田
1640～1650年代



いろ え か おく あ ぼしもんおおざら
色絵家屋網干文大皿
肥前・有田
1650年代



そめつけかさきぎもんさら
染付 鶺鴒 文皿
肥前・有田
1660～1690年代



そめつけせい じ せいがい ほんごう す
染付青磁青海波文合子
肥前・有田
1640～1650年代



はくじ る りゆういろ えりゆう こもんへんけいびん
白磁瑠璃釉色絵 龍 虎文変形瓶
肥前・有田
1650～1660年代



そめつけのうぜんかざらもんさら
染付凌霄花文皿
肥前・鍋島藩窯
1710～1730年代



いろ え ぼ たんもんおおざら
色絵牡丹文大皿
肥前・吉田
1650年代

新収蔵品展2

○会 期 2019年12月14日（土）～
2020年1月13日（月・祝）

平成29～30年度の2か年の間で収集し、新しく館蔵品となった、古陶磁や現代作品を展示します。

○展 示 数 約50件（予定）

○会 場 第1展示室



さんさい し く もんおおざら
三彩詩句文大皿
肥前・長与
1790～1820年代
溝口孝氏寄贈



そめつけなだごししょうもんおおざら
染付灘越 蝶 文大皿
肥前・鍋島藩窯
1800～1860年代
川崎ふみ子氏寄贈

～平成30年度特別企画展・企画展の報告～

寄贈記念特別企画展 人間国宝 中島宏氏寄贈
「古武雄 — ふるさと大地の記憶」

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
 ○後 援 朝日新聞社 佐賀新聞社 西日本新聞社
 毎日新聞社 読売新聞西部本社
 サガテレビ NHK佐賀放送局
 NBCラジオ佐賀 エフエム佐賀
 ○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
 第1・第2・第3展示室
 ○会 期 平成30年(2018年)10月6日(土)～
 11月25日(日) 45日間
 ○休 館 日 月曜日(10月8日(月・祝)は開館)
 ○出 品 数 207件(うち佐賀県重要文化財1点)
 ○観 覧 料 大人600円 大学生300円
 高校生以下無料

○展示構成

- 第1章 「躍動」—迫力ある大皿の名品たち
 第2章 「大地を描く」—松絵の甕など、鉄絵と緑
 彩による雄渾な装飾
 第3章 「白妙」—刷毛や筆を用いた白い文様の世
 界
 第4章 「律動と飛翔」—印判を表面に押してあら
 わされる象嵌文様
 第5章 「彩」—緑と褐色の釉が織りなす佳麗

○内 容

青磁の重要無形文化財保持者(人間国宝)であった故 中島宏氏は、自分自身の作陶に精進するとともに、肥前地域の陶磁器の研究と収集を行われました。とりわけ、生まれ育った武雄市弓野地区をはじめ、武雄地域の陶器収集には、ひとかたならぬ熱意と愛情をもつてとりくまれ、その収集品を、古い武雄焼:「古武雄^{こぶし}」として、図録の刊行や展覧会で発表されてきました。

この展覧会は、中島宏氏から、多くの古武雄が佐賀県立九州陶磁文化館に寄贈されたことを記念し、郷土の土と炎が生み出した力強い造形の世界を堪能いただくため、その収集品の中から選りすぐりの逸品を展示しました。



展示会図録

◎関連イベント 期間中、展覧会にあわせて下記のものおしが開催されました。

- 表千家教授会による呈茶
 10月7日(日) [主催] 表千家教授会
 ○記念講演会「中島宏氏寄贈古武雄—ふるさと大地の記憶—開催記念講演会」
 10月13日(土) [講師] 東中川忠美
 ○記念コンサート
 10月20日(土)「マリンバ アンサンブルコンサート」 [演奏] 香椎愛子 他
 11月10日(土)「オカリナ演奏会・体験会」
 [演奏] 山の音楽家シャナ
 ○学芸員によるギャラリートーク
 ○ギャラリートーク館長デー
 11月3日(祝日) [解説] 鈴田由紀夫



展示風景1



展示風景2



展示風景3

第115回有田国際陶磁展

○会 期 平成30年（2018年）
4月29日（日・祝）～5月6日（日）
8日間

今回も海外作品を含む全国公募展として、国内外から多くの作品が集まりました。九州陶磁文化館では、美術工芸品・オブジェ部門の会場として、入賞・入選作品90点と、産業陶磁器部門から上位3作品が展示されました。



「彩陶扁壺」
石原祥嗣
文部科学大臣賞

明治維新150年記念展 幕末明治 有田の豪商 —蔵春亭と肥磔山信甫—

○会 期 平成30年（2018年）8月3日（金）～
9月2日（日）27日間

幕末から明治期にかけて、有田焼は世界を目指します。幕末には、有田の商人、久富与次兵衛が佐賀藩から有田焼独占輸出の権利を得ると「蔵春亭」ブランドで海外輸出を再開します。

安政3年（1856年）からは、田代紋左衛門がその権利を継承し「肥磔山信甫」ブランドで多様な新しい有田焼を生み出していきます。

海外に輸出された作品、生産地・有田の窯跡や久富

家の長崎支店のあった長崎市万才町遺跡の出土品、地元である有田に伝わった作品や田代家文書などの資料を通じて、今日に続く有田焼ブランドの礎を御紹介しました。

○展示解説 毎週土曜日



開会式ギャラリートーク

明治維新150年記念展 有田晩香窯 —明治から平成の窯元の軌跡—

○会 期 平成30年（2018年）12月15日（土）～
平成31年（2019年）1月14日（月・祝）
26日間

明治に創業し、現代まで続く有田焼の窯元晩香窯。明治17年（1884年）に上絵付を専業とする赤絵屋として始まり、大正15年（1926年）には「鍋島窯」という名前で窯を開き、成形から絵付・焼成までの一貫して製品作りを行う窯元へと変わっていきます。その後、昭和初期の恐慌や第二次世界大戦、戦後の復興期、そして平成の時代へと、時代の変化に対応しながら代を重ね現在に至ります。

赤絵屋時代の製品から窯元時代の多様な製品、現代の陶芸作品まで、晩香窯庄健の豊富な資料によって、明治から平成までの有田焼の歴史を振り返る展示となりました。

○展示解説 毎週土曜日



展示風景

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて 14 Hizen Porcelain in Europe 14

19世紀の大花瓶、蔵春亭三保銘の色絵の皿、肥磔山信甫銘のカップ2

19th Century Tall Arita Vases, a Large Plate with Trade Mark Zoshuntei and Two Cups with Trade Mark Hichoan

2017年の「セラミック九州」No.53では在欧の知られざる19世紀の大花瓶を紹介したが、近年九州陶磁文化館（以下九陶と略す）で行われた19世紀の有田の輸出向け製品についての展覧会（「明治有田 超絶の美」）で示された研究の成果を参考に、今回、ポルトガルのリスボン近郊のペナ宮殿（Palácio Nacional da Pena）にある一対の大花瓶を紹介する。さらに昨年の九陶での「蔵春亭と肥磔山信甫」の展覧会図録を参考に、英国の貴族の館にある蔵春亭三保の銘が書かれた色絵の皿と、ヨーロッパ大陸にある肥磔山信甫の銘がある二種類のカップを紹介したい。

1) 2010年リスボン（Lisbon）近郊のペナ宮殿を訪れた時に一対の大花瓶を見た。現在の館長からの報告によれば、王妃マリア・ピア（Maria Pia 1847-1911）がリスボンのアジュダ宮殿（Palácio Nacional da Ajuda）の「青の間」（“Sala Azul”）のために注文したものとのことで、この大花瓶が写っている当時の「青の間」の写真や、1910年に描かれた水彩画の写真が送られてきた。この王妃マリア・ピアは、イタリアを統一したヴィットリオ・エマヌエル二世（Vittorio Emanuele II）の娘で、ポルトガル王ルイ一世（King Luis I）と1862年に結婚、1910年の革命でポルトガル王室が倒れると、生まれ故郷のイタリアのトリノに移り、1911年に亡くなっている。

参照https://en.wikipedia.org/wiki/Maria_Pia_of_Savoy

この高さ152cmの一対の大花瓶の形状は、1873年ウィーン万博に出品され、現在有田ポーセリン・パーク所蔵の高さ185cmの染付蒔絵富士山御所車文大花瓶と同じく、肩はなだらかで、首につなぎ目が見える。

片方の花瓶には波緑の口縁に欠損が見られるが、王室が倒れた時、王族の多くがブラジルに逃れる際に、その所蔵品もブラジルに送られ、またポルトガルに戻されたとのことである。その際に受けた傷か、あるいはそのまま宮殿に残され、第二次大戦後1948年にペナ宮殿に移されるまでの間に受けた損傷かわからぬが、波緑の部分の漆の下地の下に素地が見えないので、あるいはこの細かい波緑のかかなりの部分が漆だけで作られているのかもしれない。

染付で描かれた人物は芝居に出てくる武家社会の登場人物のようで、二本の大花瓶が一対になるように描かれているが、その場面を取り囲むように、口縁から

TANAKA, Shigeko

田中 恵子

- 日本アジア協会副会長
- 東洋陶磁学会（日本）会員
- The Oriental Ceramic Society (London) 会員

底部まで、縦横に施された茶色の帯状の漆の加飾は、日本から輸出される前に既にこの花瓶に損傷があって、それを補強するために施されたものであろうか。底はどのようなになっているか、館長に問い合わせると、木の台から外して底を撮影してくれたようで、その写真が送られてきたが、なんと、両方とも底一面に黒漆が塗られていて素地が見えず、目跡、銘のあるなしもわからない。その写真から外壁の底部に近い部分の漆の加飾が見られるが、長崎の松下久子氏に写真を送り意見を伺ったところ、「おそらく長崎、あるいは日本国内で加飾されたもので、褐色の下地をやや厚めにし、黒、金、赤の漆で装飾しており、幾何学模様を盛り込んでいるのが特徴で、海外に類例が複数ある」とのことであった。いずれアジュダ宮殿の「青の間」に戻される計画とのことであるが、その際に日本側の研究者が仔細に見て、修理にも携われるようにと願っている。



図1



図2



図3

図1～3 染付蒔絵人物文大花瓶A・B
19世紀後半
口径D.50.0cm,
高さH.152.0cm
図1・2田中恵子撮影
図3ペナ宮殿提供

なおアジュダ宮殿には「セラミック九州」No.47で報告した、金色に塗られた金属の透かしの台が高台に取り付けられた1650-60年代の古九谷様式の色絵の皿（王妃マリア・ピアがパリで購入と判明）の他に、直径65cm、高さ10cmの高台内に大明成化年製の銘が

ある有田の染付の大皿、有田ではないかもしれない高さ78cmの染付に色紙状の大きさの漆の加飾のある一対の花瓶が展示されている。収蔵庫から出して見せてくれた濃陶社職工加藤五輔造と裏に書かれた水注については、その写真を瀬戸市美術館館長の服部文孝氏に送って見ていただいたところ、多治見の市之倉の加藤五輔が製造主任となり、染付磁器の製造を行い、明治13年から18年（1880～1885）まで輸出向けの陶磁器を扱った商社である濃陶社の水注とのことであった。この19世紀のタイムカプセルとも言うべき王室コレクションの収蔵庫を、再調査する機会があるようにと願っている。

2) 英国のバックルー公爵（Duke of Buccleuch）家のいくつかある館の中で、最もロンドンに近いケタリング（Kettering）に所在するバウトン・ハウス（Boughton House）を2018年の夏、再訪した時に陶磁室と呼ばれる部屋に案内された。無造作に置かれていた幕末の色絵の皿の裏を見ると「蔵春亭三保造」（Zoshuntei Sanpo zo）と書かれている。

スコットランドにあるこの一族の本邸である Drumlanrig CastleやBowhillを1993年に訪ねたが、いくつもの貴族の爵位と財産が婚姻によって一家に集結、スコットランド一の大地主となり、レオナルド・ダ・ヴィンチ（Leonardo da Vinci）の「糸巻きの聖母」まで所有する財産家であるにもかかわらず、他の貴族の館で見られるような東洋陶磁が全く見られなかった。イングランドにある家ではどうかとバウトン・ハウスにも寄ってみたが、ここにも東洋陶磁はなかった。しかし、2016年、思いがけないことからこの家の次期当主と親しくなり、バウトン・ハウスを再訪したが、ほかに東洋陶磁は見当たらず、この皿も当時の当主が買ったのか、あるいは人から贈られたものか、記録もないとのことである。



図4

図5



図4・5 色絵人物牡丹文大皿（図5は裏銘）
1840～1860年代
口径D.34.3cm、高さH.4.6cm、底径D.19.0cm
Buccleuch Living Heritage Trust
Boughton House提供の写真

3) オーストリア、ウィーン（Austria, Vienna）の応用美術現代美術館（MAK）の収蔵庫にある色絵の「肥

磔山信甫造」（Hichoan Shinpo zo）の銘のあるカップ。収蔵年は1867年とのこと。ウィーン万博（1873年）の前に開催されたパリ万博の年である。



図6



図7

図6・7 色絵人物文カップ 1850～1870年代
口径D.9.4cm、高さH.8.8cm 田中恵子撮影

4) 丈の高い色絵のカップは、スペイン、ヴァレンシア（Spain, Valencia）の国立陶磁美術館（Museo Nacional de Cerámica y Artes Suntuarias González Martí）の収蔵品。1995年にオランダ人が寄贈したものであり、底に「肥磔山信甫製」（Hichoan Shinpo sei）の銘がある。後日の問い合わせの折に共蓋があると写真を送ってくれた。



図8



図9



図10

図8～10 色絵武者絵文蓋付カップ（図10は蓋）
1850～1870年代
総高H.16.8cm、カップ口径D.10.2cm、高さH.13.2cm、
底径D.4.3cm、蓋口径D.8.6cm、高台径D.3.6cm
図8・9は田中恵子撮影 図10は美術館提供

ヨーロッパでの調査は2010年当時の駐日ポルトガル大使、オーストリア出身の駐日EU大使、マドリッドの美術館、博物館への各方面からのご紹介とそこから更なるご紹介、と多くの方にお世話になり、そのご縁で後日の問い合わせにも快く応じて頂け、また国内では多くの専門家にご指導を仰いだ。ここに記して心からの感謝の意を表したい。

調査ノート

「晩香」銘の変遷について

—晩香窯庄健所蔵コレクションの調査—

佐賀県西松浦郡有田町赤絵町に^{ばんこうがましやうけん}晩香窯庄健という明治時代から続く窯元がある。ここに残されていた明治期から昭和期までの製品を、当館で昭和62年（1987年）に預かり、調査・整理をしてきた。その成果として平成30年（2018年）度の展覧会では、晩香窯庄健の歴史的な変遷を示し、当時の有田を反映した展示を行った。窯の変遷を示す手掛かりとして、製品に入れた銘に着眼し^{注1}、展覧会や解説パンフレットでも紹介したが、紙面の都合もあり、詳述できなかった。この場を借りて改めて紹介することで、近代の陶磁器研究の一助となればと思う。

晩香窯庄健は、明治17年（1884年）に初代となる庄^{しやうむけんきやう}村健吉（1859－1927）^{注2}によって赤絵屋として始まる。この時代の屋号は不明だが、製品には健吉の^{はい}俳号である「晩香」を銘として入れている。大正15年（1926年）には自宅に窯を設け、製造から絵付まで一貫して製品作りを行う窯元となる。窯元となった当初は、「鍋島窯」という名前を使用していたことが分かっている^{注3}。その後、銘として使用してきた「晩香」から「晩香窯」へと名前を変えている。

晩香窯庄健では、赤絵屋時代から窯元時代に至るまで「晩香」の銘を使用している。健吉の代表作として伝わる「色絵岩梅牡丹孔雀文大皿」の高台内には、篆書体で書かれた「晩香」の銘がある。当館所蔵の「色絵天女文大皿」も同じく篆書体の晩香銘である。また、「晩」の^{へん}扁と^{つくり}旁の位置が逆になっているものがある。この形態の「晩香」が、庄村家に残された明治9年（1876年）と記載のある画集にも書かれており、この銘と篆書体銘は、健吉が使用していたものと考えられる。



図1 篆書体銘の例
色絵天女文大皿
九州陶磁文化館所蔵



図2 逆「晩」銘の例
色絵梅文ソーサー
晩香窯庄健所蔵

また、晩香銘には縦書きと右横書きがあり、右横書きのものは昭和12年（1937年）までには使用されなくなる^{注4}。右横書きの晩香銘には、色絵のものと染付のものがあるが、染付のものは窯元となる大正15年

（1926年）以降に使用するようになったと考えられる。この右横書き銘には、ゴム版を使用したものも多い。

大正15年（1926年）から数年は「鍋島窯」や「鍋島山」等の銘を使用し、商品ラベルには「鍋島屋」、窯の煙突にも「ナベシマヤ」と書かれていた。その後「晩香窯」へ名を変えると再び晩香銘を用いるようになる。昭和5年（1930年）には晩香の右横書き銘を使用している^{注5}ため、それまでには名前を変えていたと考えられる。



図3 右横書き銘の例
色絵柿文小碗
晩香窯庄健所蔵



図4 縦書き銘の例
色絵花文蓋付湯呑
晩香窯庄健所蔵

昭和以降の製品には、染付で縦に書く銘が多い。右横書き銘と違い、縦書きにゴム版のものは見当たらない。昭和初期には帶留やカフス釦といった服飾品を生産していた。これらは小物のため、製品の形状に合わせ、縦向きや横向きに書いているが、字体は縦書きのものに近い。縦書き銘も数種類に分けられるが、それが変遷を示すかはわからない。大まかに「晩」の字の右ハネが横に伸びるか、上に伸びるかで前後を考えているが、紀年銘資料と突き合わせながら精査する必要がある。

以上、明治期から昭和期にかけて晩香銘の変遷をまとめた。この他、輸出向けと考えられるローマ字の銘等もある。海外に輸出された晩香窯製品や紀年銘資料の情報を収集し、この変遷をより確実にしていくことを今後の課題としたい。

（宮木貴史）

注1 この銘の調査は、預かった当初に担当した鈴田由紀夫（現館長）の整理・分析を引き継いで行ったものである。

注2 故人のため敬称を略した。

注3 「明治維新150年記念展 有田晩香窯 - 明治から平成の窯元の軌跡 -」展示解説パンフレット

注4 昭和12年（1937年）は4代庄村喜美江が嫁いだ年。この頃には使用していなかったという鈴田由紀夫の聞き取り調査の記録による。

注5 昭和5年（1930年）の箱書きのある右横書き晩香銘の資料がある。個人蔵。